



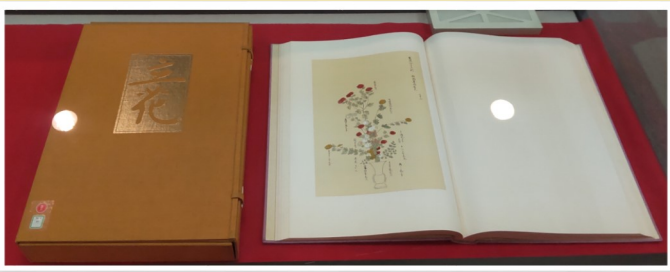
所蔵資料紹介 ～大型本から～

『池房専好立花図』(講談社, 1970年) より 「六十二図」(菊一色)

前号では閉架書庫にある大型本を紹介しましたが、いかがでしたか?引き続き今号では開架書架(=皆さんが自由に閲覧できる棚)に配架されている大型本をご紹介します。

今回紹介する資料は陽明文庫所蔵『池房専好立花巻物』(卷子本1巻)の複製本です。当絵巻には江戸時代初期に活躍し、立花を大成させた二代目専好によって寛永5～11年に立てられた93の立花図が描かれています。二代目専好の立花図については複数の伝世資料があり、池坊総務所でも「立花之次第九拾三瓶有」(重要文化財)を所蔵しています。陽明文庫は近衛家に伝わる非常に貴重な古典籍を多数所蔵しており、中でも『御堂関白記』(国宝)が有名です。当該資料の原本は卷子本ですが、複製は原寸大の冊子体で作成されています。絵図には彩色が施され、一部例外はありますが番号、作者、作成年月日、場所、花材が表記されています。

展示は62番目の寛永8年10月16日に仙洞御所に立てられた、菊のみで構成された立花「菊一色」の絵図です。解説には「真に「菊」(紫)、副に「菊(南禅寺)」、「真の花の色に菊の本色である黄色を用いなかったところにも、専好の作意のうかがえる一瓶である。」とあります。森部隆著『専好立花の世界：「臥雲華書」に学ぶ』には、当絵図を実際に生けて再現した写真が掲載されています。あわせて閲覧してみてください。



展示資料:

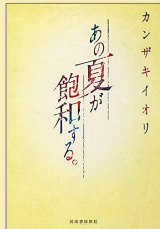
・『池房専好立花図 [本編], 解説』1970年, 講談社(793.2 竹ノ / 00010894 他)

参考資料:

・池坊専永 編『専好立花の鑑賞:《全解説》重要文化財指定九十三瓶図』2020年, 日本華道社(793.6 竹ノ / 00063603)
・森部隆 著『専好立花の世界:「臥雲華書」に学ぶ』2022年, 日本華道社(793.6 毛ハ / 00066060)

学生からのおすすめ図書の紹介 ～医療クラークコース(1年生)編～

この本のジャンルは心理フィクションで、登場人物の一人一人の過去や、抱えている問題それぞれの人生や生き方などが描かれています。そして、人間の欲望や、犯罪などについても描かれていて人間味の強い物語で、自分の価値観、生き方、人生と照らし合わせながら読むと、考えさせられたり、共感が生まれたりして作品をより楽しむことができます。また、この作品は作者のオリジナル楽曲が本になっているので、曲と併せて楽しめます。(永尾麻理萌)



カンザキイオリ / 著
『あゝ夏が飽和する。』
(9月末に入る予定です)

この本は、結婚式を3ヶ月後に控えていた新婦が原因不明の病にかかり、長い間昏睡状態になってしまいます。六年後、新婦は意識を取り戻しますが、結婚相手のことを覚えていませんでした。その後、リハビリを経て、回復した新婦の奇跡と、支え続けた新郎の献身的な純愛がとても伝わります。2人の深い愛と相手信じ、待ち続けることのすばらしさ、家族、友達、恋人への感謝を「8年越しの花嫁 キミの目が覚めたなら」でぜひ感じてほしいです。(佐藤萌加)



岡田恵和 / 脚本
時海結以 / 著
『8年越しの花嫁』
(9月末に入る予定です)

花と寺社～梨木神社～

京都御苑の東に位置する梨木神社は三条実万、三条実美をお祭りしている神社です。かつての三條家の邸宅跡に造営され、社名の由来は旧地名の梨木町から。御神水の「染井」は京都三名水のひとつで、枯れずに現存する唯一の名水です。境内には萩が咲き誇り、「萩の宮」の別名でも有名です。

毎年9月中旬～下旬の萩の開花時期には「萩まつり」が開かれます。神事のほか舞楽や居合など様々な奉納行事が催され、お茶席も設けられます。献詠された和歌や俳句の短冊が萩の枝に結ばれるので、普段とは少し違う風流な萩の姿を見ることができます。今年の萩まつりは23日(土)、24日(日)の開催だそうです。(最新の情報はHPをご確認ください。)

参考文献・URL

・淡交社編集部編『9月の京都 京都12か月』淡交社, 2016年, P54-55(291.62 ｷｯﾌﾟ)
・「京都」2023年9月号, 白川書院, P100
・梨木神社HP <https://www.nashinoki.jp/>



花と文学～秋の七草～

山上憶良の秋野の花を詠む歌二首

「秋の野に 咲きたる花を 指折り かき数ふれば 七種の花」

「萩の花 尾花葛花 なでしこが花 をみなへし また藤袴 朝顔が花」(萬葉集巻八・一五三七, 一五三八)

「秋の七草」を知っていますか? 萬葉集には山上憶良が詠んだ七草の歌が収録されています。「尾花」はすすき、「朝顔」は桔梗または朝顔など様々な説があります。577577の旋頭歌の形式で、七種の花が見事に歌われており、大岡信は「このような歌は平凡なようで、知恵と知識がないとつくれません」と述べています。秋の野原でロズさみ、リズムを感じてみてください。

参考文献

・垣見修司ほか著『万葉植物の歌鑑賞事典』和泉書院, 2023年, P176-177(472.1 マ3)
・佐竹昭広ほか著『萬葉集 本文篇』塙書房, 1971年, P191-192(911.12 ㍻㍿)
・大岡信編『星の林に月の船』岩波書店, 2005年, P30(911.108 材材)

